

夏目漱石における「伝統」と「近代」：儒学・禅と西洋思想の交わり

藤本，晃嗣

<https://hdl.handle.net/2324/2236001>

出版情報：九州大学，2018，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	藤本 晃嗣			
論文名	夏目漱石における「伝統」と「近代」 — 儒学・禅と西洋思想の交わり —			
論文調査委員	主査	九州大学教授	松本 常彦	
	副査	九州大学教授	波瀾 剛	
	副査	九州大学准教授	西野 常夫	
	副査	福岡女子大学名誉教授	石井 和夫	
	副査	熊本大学准教授	坂元 昌樹	

論文審査の結果の要旨

本論文は、夏目漱石の文学における「伝統」と「近代」の相互作用的な関係性を中心に考察する。「伝統」は、禅を中心とした仏教言説や儒学を主とし、「近代」は漱石が受容した西洋文学や哲学を主とし、分析の基本的な方法としては、発言や作品の典拠として機能する「伝統」また「近代」についての関連資料を特定し、その受容の具体的様相の検討を行う。その分析から導かれるのは、漱石の文学に潜流する「伝統」の言説と「近代」の言説の相補的で相互作用的な関係性であり、本論文は、それを踏まえて作品の具体的な表現や文脈について新たな解釈を提示している。

論文の構成は、序、本論（二部五章）、結から成る。序は、先行研究の概観・本論文の課題を説明する。本論は、第一部が、第一章「自己本位」におけるイプセンと儒学—漱石の「イプセン流」書簡をめぐって—、第二章「『それから』における「誠」—日本近世儒学の伝統—」から成り、第二部が、第三章「漱石の禅認識と『禅門法語集』」、第四章「『行人』における禅—公案との関わりから—」、第五章「『行人』における禅とW・ジェイムズ、H・ベルクソンの交わり—「実行的な僕」をめぐって—」から成る。結は、本論各章の概要と意義を述べ、今後の課題に言及する。

第一章は、明治・大正期文学における近代的自我や自己本位の問題と大きく関わるイプセン受容について、漱石の受容の特色が、自己を利己的性格ではなく社会を先導する意義あるものとして捉えている点にあるとし、そうした受容の背景に儒学的な「狂」の精神が介在すると指摘した。

第二章は、小説「それから」を取り上げ、従来の解釈では「近代的知識人」の典型とされてきた主人公代助の根底に、伝統的な「誠」を中心とした倫理構造が見られることを指摘した。

第三章は、漱石の作品から禅を典拠とする文脈を洗い出し、漱石旧蔵の『禅門法語集』などの資料と対比することで漱石の禅認識の内実について資料から析出した。

第四章は、漱石の禅認識の代表的事例と目される「行人」の「塵勞」篇の典拠となった「碧眼録」や「無門関」の章句を特定し、主人公の長野一郎が禅的世界を希求する構造に注目し、漱石に近代と禅を相補的に把握する認識があることを指摘した。

第五章は、漱石の晩年における禅への再接近の背景として、W・ジェイムズやH・ベルクソンの思想への関心と傾倒があることを明らかにし、漱石と禅の関わりという問題について、ジェイムズおよびベルクソンの哲学の受容という視点から捉え直し、先行研究で問題になることの多かった「行人」の一場面を事例に、その観点から新たな解釈を提示している。

以上により、漱石文学の伝統的要素および近代的要素という別個には研究の蓄積が厚い二つの課題を柔軟に結びつけ、漱石における近代的要素の受容に果たした儒学や漢学の機能を究明している。

本論文は、上記の内容を通じて、①漱石における西洋文学や西洋哲学の受容において、儒学や漢学が先行研究で言われてきたように一種の逃避場として機能するだけでなく、積極的な意義を持つという一面を抉出し、②その観点から先行研究の蓄積が厚い漱石作品の新たな有効な解釈を提示する。さらに①②の過程で、③漱石作品の典拠を特定している。

以上から、論文調査委員会では全員一致で、本論文が比較社会文化学府の博士学位（比較社会文化）論文として十分な水準にあると判断した。